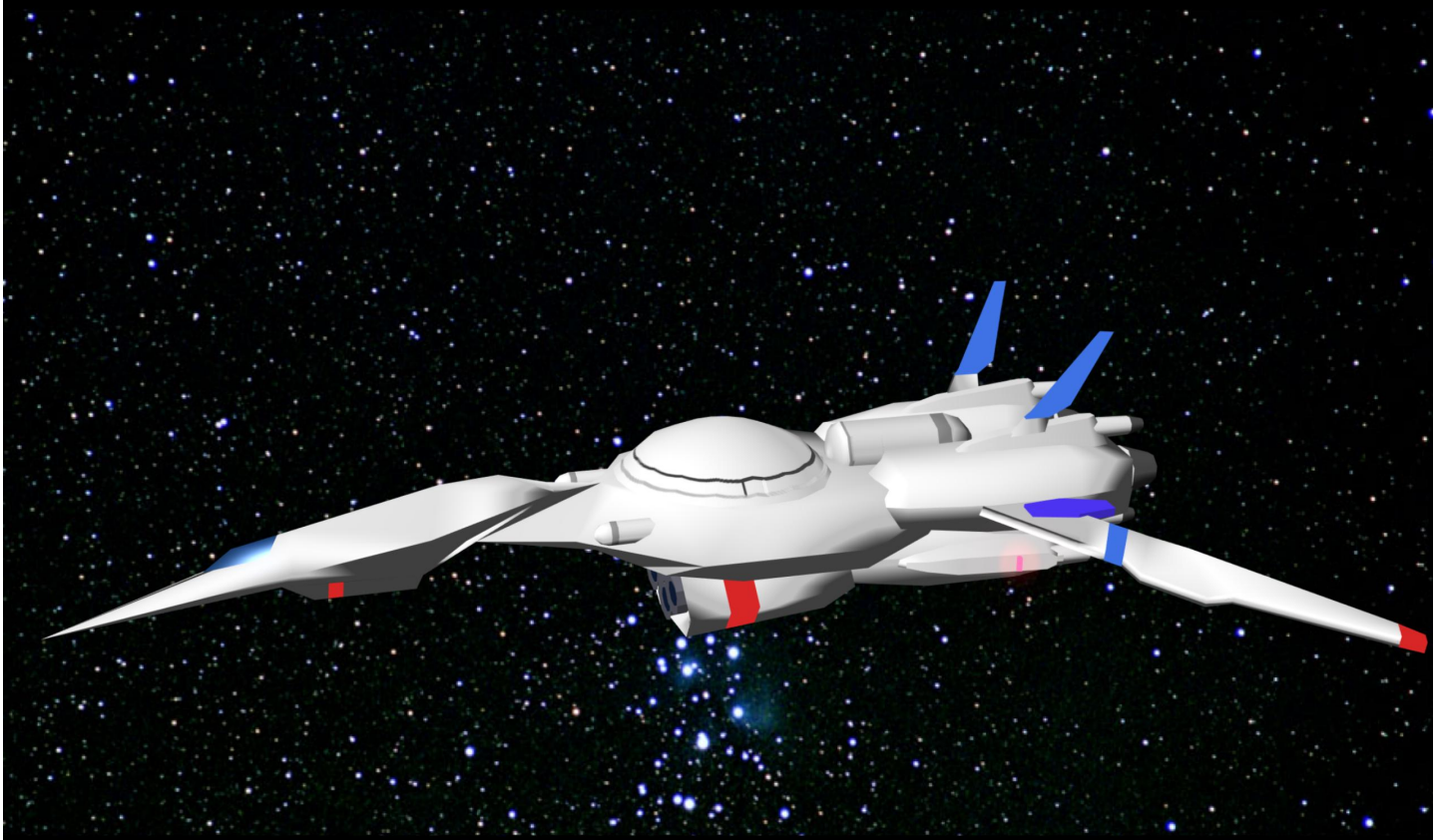
# STAR ARCHIVE



PRESENTED BY: UGSF.ORG

# INDEX


P2　『ある日の二人』

P5　『フォートスター空域会戦』

P14『NewSpaceOrderへようこそ！』

ライナーノーツ

# ある日の二人

文・にーやん
作画・マナ

「おい、チビッ子。ちょっと遊びに行くぞ」
「チビッ子ではない、名はアイルヤだ」
ユウ＝サイトウの発した一言に、チビッ子と呼ばれた少女、アイルヤはいつもの応答を返しつつ、不思議そうな顔をした。
「なんだ、俺がお前を遊びに誘うのがそんなにおかしいか？」
さほど覇気のない、いつもと変わらないオフの時のユウそのものだ。しかし、その目はしっかりとアイルヤを見据えていた。
「ユウからそんなことを言うなんて、珍しい。誰かの入れ知恵か何かだろうか？」
暴に撫でながら、アイルヤから目を逸らした。自分の髪を手で乱
アイルヤの言葉に、ユウが顔をしかめる。
「うっせ。リックの奴が『戦争屋の仕事ばかり見てるアイルヤが可哀想だよ、たまには遊んであげようよ』なんて言うからな。それもそうだ、俺もお前の保護者みたいなもんだし、遊んでやるのもいいかと思ってな」
アイルヤが納得したように頷く。
「やっぱり入れ知恵だった」
俺だって、言われなくてもそれくらいは考えてたんだよ」
ユウの不機嫌そうな様子を見ながら、アイルヤは微笑んだ。
「それじゃあ、たまにはユウに付き合おう。特別だぞ」
「はいはい、特別に遊んでいただきますよ」
投げやりな返答だが、そこに不快の色はない。それなりに長い間を二人で過ごしてきたのだ。こういうものだと、お互いが十分理解していた。しかし、遊ぶことは滅多にない。
アイルヤは、興味津々に尋ねた。
「それで、何で遊ぶのだ？」
ユウが頭を掻く。
「何も考えてなかったからな。……そうだな、二人で遊ぶなら、定番はキャッチボールとかだと思うんだが」
「キャッチボール？」
首をかしげるアイルヤを見て、ユウが顔を曇らせた。
「お前、知らないのか？　キャッチボール」
「私の国では、そのような遊びはなかった」
はっとする。アイルヤは、謎の第三勢力の人だ。文化も遊びも違っていておかしくはない。
「そうか」
短くそれだけを答えて、ユウはまた考え込む。アイルヤはそれを見て、口を開いた。
「ユウがやりたいのなら私はキャッチボールとやらでもかまわない。興味もある」
「いや、別に無理にやりたいわけじゃないけどな」
「私は、もっとユウたちについて知りたい。だから、知らないことは教えて欲しい」
アイルヤの目が、ユウの瞳を見つめている。混じり気のない、純粋な目。それを見て、ユウは表情を緩めた。
「まあ、アイがそういうなら、今日はキャッチボールでもするか」
「そうしよう。ユウ、遊び方はどうするのだ？　難しいか？」
「安心しろ、簡単だから。とりあえずは、どっか広い場所を探さないとな」
「公園があったはず。あそこならどうだ？」
「そうだな、そうするか」
「では行こう」
少しだけ弾んだアイルヤの声を聞きながら、ユウは苦笑しつつ部屋を出た。

長期間宇宙を駆け巡るアルタイルには、当然人間の生活に不可欠なスペースが存在する。娯楽のための公園もそうだ。
アイルヤとユウは、人工芝を踏みながら広いところを求めて歩き回る。その途中、ユウはアイルヤに遊び方を説明した。
「キャッチボールの遊び方は簡単だ。ただこのボールを投げあう、それだけだ。俺が投げたらお前が取る。お前が取ったら俺に投げ返すんだ。わかったか？」
「わかった。しかし、それは面白いのか？」
アイルヤが首をかしげた。
「これが意外と楽しいんだよ。……ほら、ここならできそうだな」
公園の中心の、開けた場所にたどり着く。広場を囲うように植えられた木々の緑が心地よい空間を作っていた。
「アイ、ちょっと後に下がれ」
「わかった」
ユウの指示で、アイルヤがユウと距離をとる。
「オーライオーライ……ストップ。このくらいなら、チビッ子でも届くだろう」
5m程の間隔で、二人が向かい合う。アイルヤは、いまや遅しとボールを待っていた。
「では、始めよう。ユウ、ボールを投げてくれ」
「あいよ、ほらっ」
ユウがゆっくりとボールを投げる。ボールは緩やかな曲線を描き、アイルヤの手の中に納まった。
「おお」
アイルヤが手の中のボールを見つめながら、感心したように小さく声を上げた。
「いいか、力を抜いて、さっきの俺みたいにしてゆっくり投げるんだ」
ユウが声を掛けると、アイルヤはゆっくりと頷いた。
「わかった。いくぞ、ユウ！」
アイルヤが見様見真似でボールを投げる。しかしボールはあらぬ方向に飛んで行き、芝の中に転がった。
「ヘタクソだな」
ニヤニヤと笑いながら、ユウはボールへ向かう。
「て、手元が狂っただけだ。大丈夫、次はちゃんとユウに投げる」
少し焦った様子でアイルヤは答えた。
「おかしい、ユウのボールはまっすぐ飛ぶのに、私のは飛ばない……」
「最初はそんなもんだ。もっと楽に投げろ、ほら」
ユウが拾ったボールを投げる。ボールは再び、アイルヤに吸い込まれるように飛んでいった。
「むー」
アイルヤは難しい顔でボールをまじまじと見つめた。
「ボールを見ても何にもならないぞ。ほら、とにかく投げろよ。もっと力を抜いて、な」
「わかった。……今度こそ、大丈夫だ」
アイはそう言って再び投げる。しかし今度は勢いが足りず、ボールはユウの前に転がった。
「惜しかったな」
「今度こそ！」
ユウが投げ、アイルヤが投げを繰り返す。しかし、アイルヤの投げたボールは、まるでユウを避けるかのようにあちらこちらへと飛んでいった。
「お前、相当のノーコンだな」
「うう」
ユウの指摘に落ち込むアイルヤ。既に十回以上投げていたが、一度もアイルヤの球はユウに届いていなかった。
「まあ、そう落ち込むな。もっとしっかり、俺を見て投げてみろ。そしたら違うかもしれないぞ」
「わかった」
アイルヤがユウをじっくり見据え、深呼吸する。その目は真剣だ。
ゆっくりとモーションをかけて、投げた。
アイルヤの手を離れたボールは、スピードをつけながら今度は真っ直ぐに、ユウに向かう。

「そろそろ戻るか」
心地の良い汗を流しながら、ユウが言った。
「もう食事の時間だ」
アイルヤも頷く。二人はボールを持つと、そのまま広場から離れた。
「どうだ、キャッチボールも奥が深いだろう」
部屋への廊下を歩きながら、ユウはアイルヤに言った。アイルヤは、しみじみと頷く。
「ボールを投げるだけなのに、意外と難しいのだな。キャッチボール、あなどれない」
「だろ？　次は変化球を教えてやる」
ユウはそう言ってアイルヤに笑いかけた。
「変化球？　なんだそれは」
「ボールがこう、曲がるんだよ。縦とか横にな」
アイルヤが驚愕に目を見開いた。
「なんだと！　それは大変だ、投げるのが難しそうだ」
「地獄の特訓をするから、覚悟しとけ」
「地獄？　地獄なのか？」
怖そうに体をすくめるアイルヤを見ながら、ユウはふっと尋ねた。
「……で、どうだ。今日は楽しかったか？」
それを聞いて、アイルヤは顔を上げる。二周りは違うユウの顔を見上げながら、アイルヤは答えた。
「とても楽しかった。ユウ、今日はありがとう」
そして、満面の笑みを浮かべる。
ユウもまた、その顔を見て満足げに笑った。
「まあ、また遊んでやるよ。お前の保護者としてな」
「私がユウの保護者ではないのか」
「チビッ子はチビッ子らしくしてろ。それより、今は飯だ。シャワー浴びたら、思いっきり食おうぜ」
私はチビッ子ではない、と反論するアイルヤを見ながら、ユウは思った。
たまにはこいつと遊ぶのも悪くないな、と。

# 軍事帝國

**我**が帝國は『異なる文明圏』の動向を伺う気はない。
何故なら、返事を訊く必要がないからである。

―安寧を呼ぶ勝利とは複数の力の存在を認めない事―

# 銀河連邦

**幾**度となくU. G. S. F. の英雄がそうしてきた様に…
UIMSを、ザディーンをそうした様に…自由と平等の敵は
等しく葬られる事になるだろう。

―銀河連邦とは人類の自由なる生命の砦―

# STARBLADE
## EXTEND-MISSIONS IN NEW SPACE ORDER WAR
## EPISODE 01 フォートスター空域会戦


2D ARTS 火鳥雄希
3D WORKS/TEXT Storch


地球と呼ばれる惑星を故郷とする人類の子らはオーシア・ユージアの2大陸を統一後、宇宙へ進出、そして数世紀後には銀河連邦（U. G.）を形成するに至る。
そこから更に数世紀、侵略機械集団（UIMS）人間型知的生命体（ザディーン）を初めとする外敵を排除しながらも着々とその版図を拡大し星系・星団級の国家へと成長する……

しかし、それまでの間に地球人類はただ一度も同水準の文化・国家を有するに至る規模の知的生命体種と遭遇出来ずにいた。

本来であれば、類似性のある、或いは同水準の文化形態を持つ文明圏との遭遇は人類にとって歓喜すべき事件となり得たはずである。
しかし、その事態は最悪な形で現実となった。

ある年に発生した銀河連邦移民船団の消失事件。
それはこれまでにも交戦経験のある外敵であるUIMSか同規模の外敵、或いは反乱による物と思われたが、それは大きな間違いであった。

ともすれば銀河連邦以上の版図を持つばかりか銀河連邦宇宙軍（U. G. S. F.）を遥かに超える軍備を有する国家『軍事帝國』による電撃侵攻が連邦領に対し、開始されていたのだった。

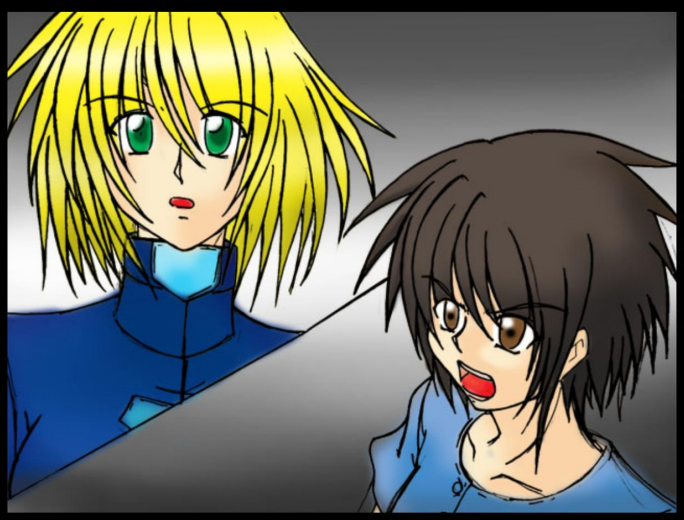
ほとなくして『帝國』の言語・文化・体制等が学者達の研究で明らかになるにつれ、銀河連邦の指導者達は言葉を失う。

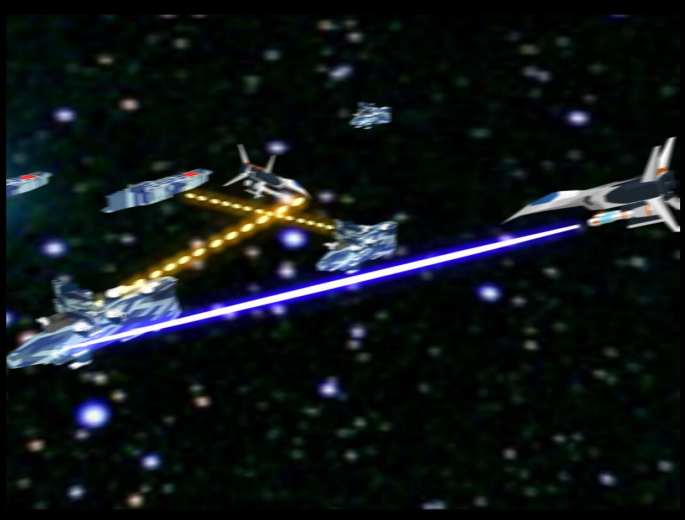
『帝國』はただ一人の支配者『総統』によって支配され、いかなる形でも異なる勢力＝国家の存在を認めず、これを支配する事で銀河系全土に覇を唱えようとしているというのである。

最早、和平交渉の余地等は無く、連邦と帝國は実質上の全面無制限戦争、いわゆる「The New Space Order War」へと突入。

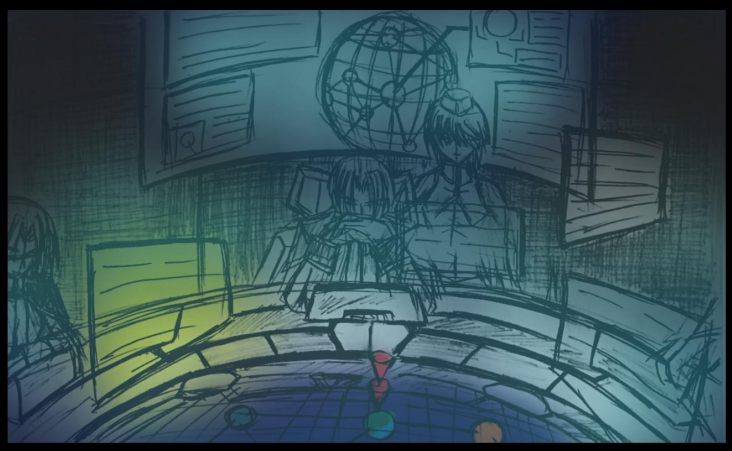
そして更に数世紀、銀河連邦・軍事帝國の境界に位置するフリーファイアゾーンの一つ……フォートスター空域にて、新たな戦いの火蓋が切って落とされようとしていた――

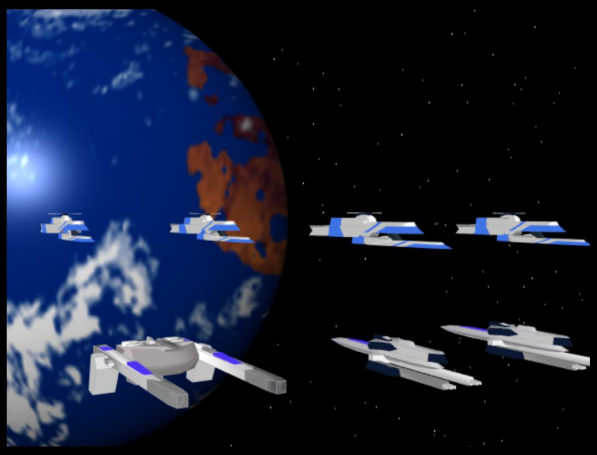
『ルーダ アインニング！』（団結を！）
『ルーダ トライゴー！』（忠誠を！）
『ルーダ ヴィナ！』（勝利を！）
連邦、帝國双方がフォートスターに展開してから二日後、軍事帝國航空宇宙総軍・第十六機動艦隊旗艦「ベクトラ」の艦橋では同艦隊を指揮するガル・グルゼーグ・スクィーラ（主力艦を預かる上級指揮官の意。帝國では公用語にゼビ語、固有名詞にノルド語を用いる）ヴェネティクトが部下達に檄を飛ばしていた。
二日間の睨み合いに痺れを切らしたかのか、帝國の機動艦隊は艦載機「ゲイレルル」（連邦ではこれについて、トンボと呼称している）の大編隊を先陣に、続いて戦列艦（連邦での呼称はシーラカンス）を半包囲陣形にて前進させ、攻勢に打って出た。
対する連邦宇宙軍、UGDFのアラン・ベイツ大佐率いるフォートスター攻略艦隊も迎撃作戦を開始、高い火力を有する帝國に対し、戦艦・航宙機による超長距離攻撃にて対抗する。

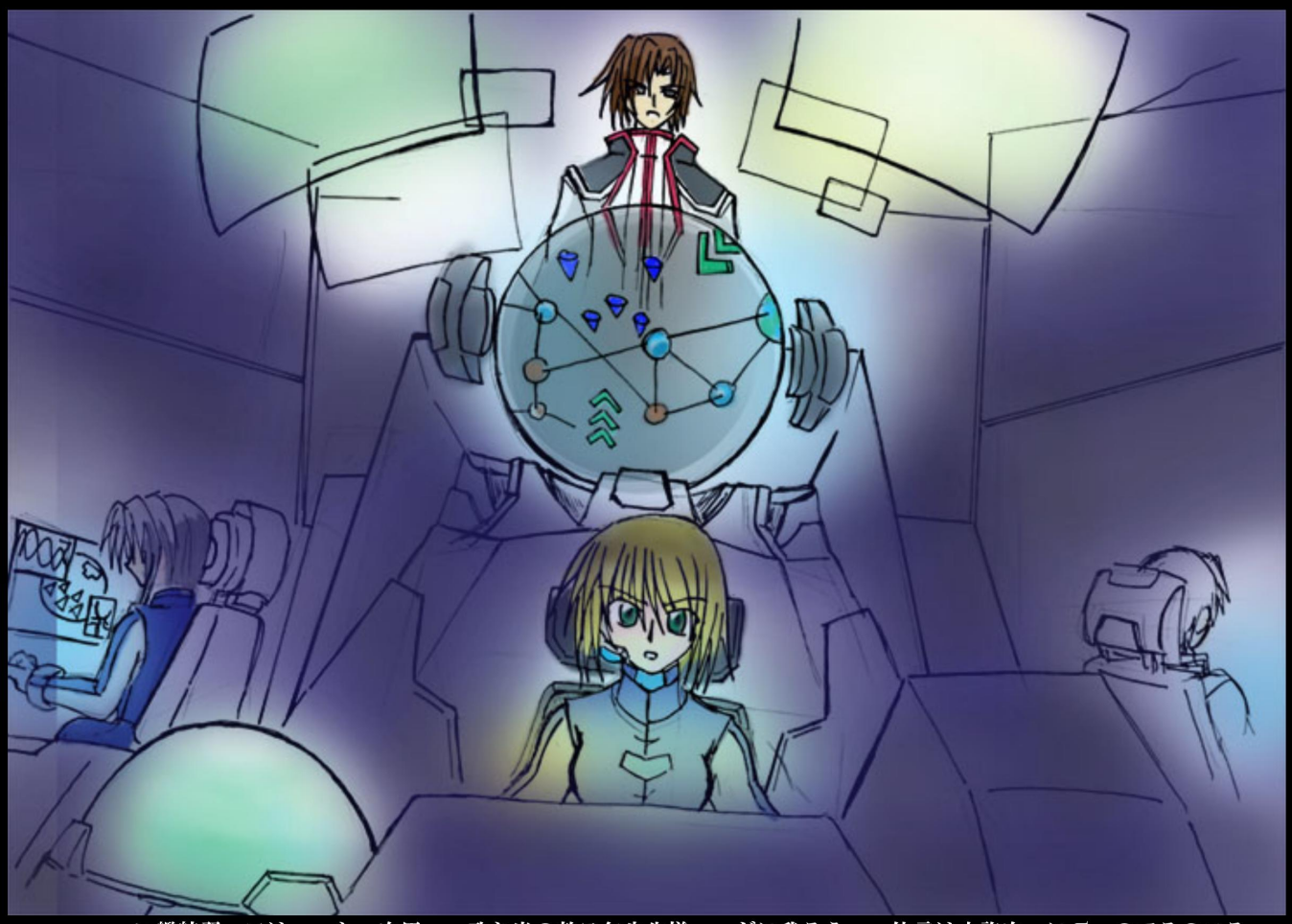




「縦深陣を形成し、護衛艦はキャパシタ砲艦（大型シールドを有する盾艦）と共に前列に回れ！CIWSでトンボを全て撃ち落せ、戦艦は限界射程距離まで後方に下がり、長距離攻撃で敵艦を狙撃！」
勇猛さに欠くベイツ大佐らしい策ではあるが、交戦開始後の戦況からすれば有効であっただろう。
「ベイツ大佐、命中精度が落ち込みつつあり、このままでは航宙機隊との連携にも支障が生じます。一旦、後方の戦艦も前進させる事を提案します。」
副官のセフィールが提案するも、検討の間も無く、それは却下された――直後、艦隊に支援要請が入電、艦橋に緊張が走る。
「こちらメビウス中隊！　現在シーラカンスに完全包囲された、砲撃支援を請う！」
航宙機・ジオキャリバー2の一部隊、メビウス隊が完全に敵陣に取り残されていたのである。
「戦艦以上の対艦能力で敵を攻撃するのが彼らの役目ではないのか！　自力突破を命じろ！」
ベイツのヒステリックな悲鳴にも近い返答がディアスタシオン通信で戦場に反響する。
「メビウスリーダーよりルーキーへ、お前にこの包囲網突破は荷が重い、8秒だけ時間を作る。全力でPT（親機）へ戻れ！」
ルーキーと呼ばれた隊員、ユウキは一度こそ躊躇したが、意を決しブースターを点火した。
「私たちの部隊……精鋭集団であったメビウス隊までが見捨てられるなんてね……」
ジオキャリバー2を母艦まで牽引する親機・所謂パスファインダーとドッキングを果たしたユウキは涙混じりに操縦コンソールを叩き付ける。
モニター越しには僚機の残骸が映っていた……
「これ以上は痛み分けね、総統もお喜びにはならないでしょう。　全艦、隊列を正し転進を。」
長時間の砲撃戦は連邦・帝國双方に多大な損害を出し、消耗戦を避けるべく帝國の艦隊が後退する形で一端の終結を迎えた。
「無事で良かった？　良いわけないじゃない！」
その二日後、UGDFの宇宙港にある軍医療施設でセフィールは友人の激しい怒号に晒された。
「部隊のメンバーは皆死んだわ、うぅん、シータやレイピア、エコー、殆どの部隊も壊滅したの！　たった数度の支援砲撃が無かったせいで！　旗艦だった戦艦シリウスの艦橋でセフィ達は何をやっていたの？　ただ安全な場所で見物をして楽しんでおいて、『大丈夫？』なんて、最低よ！」
友人であったパイロット、ユウキの負傷がした一報を聞き、駆けつけてきたセフィール中尉に、彼女の激しい怒りは重く圧し掛かる事となる。







それから半年後……
コスモ＝ラグーン星系第４惑星ガイアー銀河連邦の母星では臨時の防衛議会が召集され、軍・政府そしてゼネラルリソース社高官らが、先の会戦にて芳しい結果が得られなかった件について、事態の収拾をつけるべく、議論を交わしていた。

U.G.S.F.側から出席していたエルネスト少将が徐に口を開く。

「ベイツ大佐は先の作戦で心労がかさんでいる。次期作戦の指揮は一旦控え、休息を取らせる事を許可頂きたい。」

十分にオブラードに包まれた表現だったが、それは同空域の戦力を完全に再構築せざるを得ないと言う事であった。

他のU.G.S.F.側出席者達も無言で頷く。

「しかし、他の戦線から優秀な指揮官を回すのなら、当然引き抜き元の損害は増す。

その分の補填にもだいぶ予算はかさむだろう。

我らがゼネラルリソース社としても、決して無限に出資は出来ない事だけは常々ご留意頂きたい。」

ゼネラルリソース社側出席者達から声が上がる。

「この辺りの損失補填は勿論、最低限の物となる様に、政府はU.G.S.F.と十分検討をさせて貰う。

先ずは皆さんにこれより６ヶ月に渡り、軍需品の生産ライン稼動率を９％上げて頂きたい。

勿論、その分の還元はさせて頂く。

そうしてスターフォートには十分な戦力を投入する。

敵は我が連邦に対して大型艦の生産速度では劣るのは機知の事実。

次に物量戦を仕掛ければもう当分は余計な出費を強いられるような事態とはおさらば出来ますからな。」

政府代表の議員が舌足らずな口調で話し出す。

「異議なし」「賛成」「止むを得ないか」

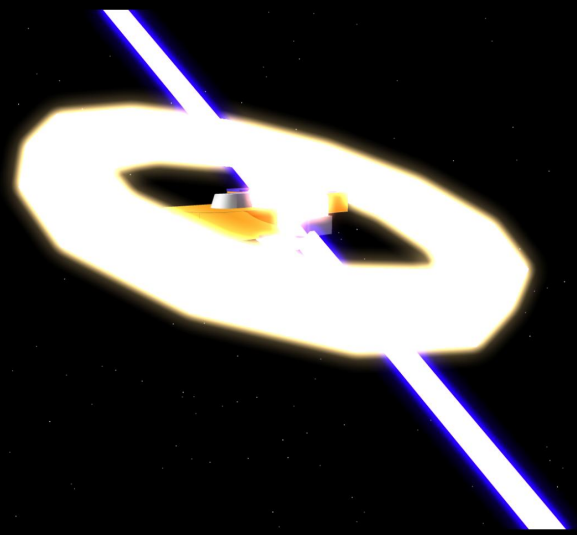
円卓から積極的・消極的問わず、肯定する声が次第にあがりだしていた。

かくて、中央より指令が下される事となる。

『エクシア方面軍司令ウィリー・クラウス大佐は本日を持って同任務を解任、同日より第二次フォートスター攻略軍司令へと任命する。』

翌月、フォートスター空域U.G.S.F.前線基地に航宙機母艦オーレリアが入港。

艦橋には指揮官クラウス、副官のセフィールがいた……



第二次フォートスター空域攻略作戦を目前に控えU.G.S.F.の前線基地は慌しい空気に包まれていた。

例えば同空域のみならず周辺星系・星域規模の移動物体を監視し、物体から発せられる識別信号の有無を認識、敵戦力の総数をエリア別に認識するディアスタシオン干渉波レーダーサイトのワッチ達はほぼ不眠不休で空域を参照する象限を睨み、その周辺にも敵増援の兆しが無いか、日々変動し続ける数値を作戦部に提出し、激しい議論を交わしていたし、前線基地に多数配備されている改・ギムレッツホワイト3級スペースベースでは駐留艦隊の航宙機母艦に配備されるジオキャリバー2のパイロット達が、最後の猛訓練を基地所属のベテランパイロット達から施されていた。

そうした中、前線基地周辺に展開中のオーレリアでは、セフィール中尉が探査船アーレイバークと定時連絡を交わしていた。

「こちらアーレイバーク、未確認エリアS48の調査結果を転送する……とはいっても、まぁ何も無いんだがな。」

『こちらオーレリア、データ転送ご苦労様です。』

「しかし奇妙な物だな。どんなに帝國の生産速度が連邦を下回るにしても、モヌケのカラとは……」

事実、この数日間基地所属の探査船が総出で周辺の未到エリアを捜索したが、敵艦隊の姿は無く、レーダーサイトが算出した周辺移動物の総数は連邦のそれを除くと極少数であった。

艦隊内でも既に敵は未到エリア――つまり帝國領の惑星を放棄し、撤退を開始しているのではないかという意見も出始めていたし、クラウスもその可能性の有無をU.G.S.F.本部の情報局と協議していた。

しかしながら、それでも偵察ドローンの消失等の事例が発生していなかったわけではなく、どこかにいるかもしれない少数の敵、という厄介な代物を暫く相手にしなければならない、という現状はさして変化する事は無かった。

「あー、セフィール中尉、ちょっとまってくれ。今、こちらのタキオンレーダーが移動物体を補足したよ、亜光速でこちらに接近中……これは直撃コースだ、緊急回――」

それは突然、一瞬の出来事だった。

アーレイバークが突如一条の光線に貫かれ、四散したのである。

『な……！』

セフィールは絶句した。

戦場にいる以上、敵と味方が存在し、どちらかが死ぬという事実は良く認識していたはずだ。

しかし、今は艦隊戦の真っ只中でもなく、敵が本当にいるかも判らないような状況下で、それも今会話を交わしていた相手が、一瞬にして消滅したのである。

かつて、ユウキがセフィールに言った言葉を反芻しながら、セフィールは暫く立ち尽くしていた。

「――これで8件目です。

中には旧型ながらも巡洋艦を護衛に付けた物もありながら、未踏エリアで次々と哨戒部隊が全滅させられる事態が発生しています。

敵が単純に少数戦力で抵抗していると決め付けるのも些かリスキーかと。」

クラウス大佐はディアスタシオン通信端末越しに映るエルネスト少将に報告を行っていた。

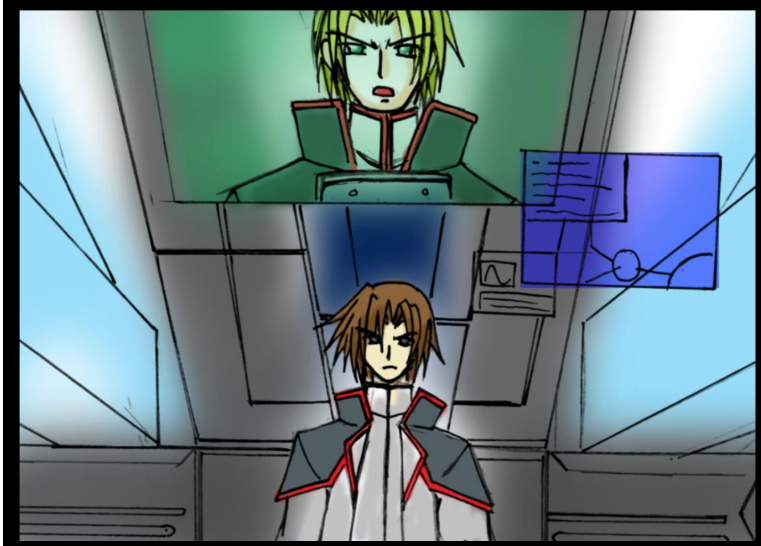
「君がそこまで心配する必要は無い。

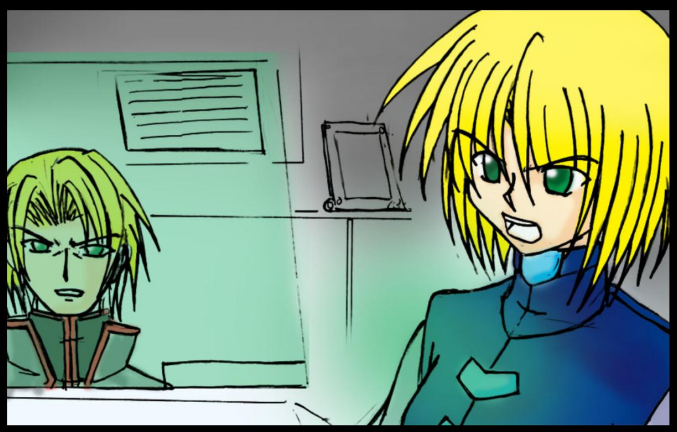
U.G.S.F.本部の作戦部門でも、現状の戦力があれば戦略レベルB++までの例外事項にも対応可能である事を証明している。」

エルネスト少将はクラウス大佐の意見を一蹴した。

「了解しました。」

クラウス大佐はそれ以上の発言を諦め、司令室を後にした。





「なんでも、クラウス大佐に作戦の見直しを求めるよう進言したそうだな。」
クラウス大佐とエルネスト少将の通信から数分後オーレリア居住エリア、セフィール・エルネスト中尉の自室ではセフィと少将の会話が交わされていた。本来、作戦期間中にディアスタシオン通信を用いて私用通信を自室から行う事は禁じられているが、接続要求元が一定以上の権限を持つ場合ある程度の「融通」が利いていたのである。

『えぇ、副官としての義務を果たしたまでです。想定外の事態による損害を最低限に抑え、連邦に貢献するのはU.G.S.F.将兵にとって当然――』
「戦場、最前線で戦うのが怖いのであれば、中央勤務の椅子も用意出来る。
二度までも最前線への配属を希望したお前の我侭が通るよう、多少の手助けはしてきたが、中央の判断までに逆らうのは感心できんな。
そこまでしたければ、今すぐ中央で相応しい学習を受けるのだな。」
『私は、お父さん――！
もとい、少将に我侭や反抗をするつもりなんて！』
事態が個人の我侭ではなく、重大な事である事を伝えたくとも、血のつながりがその妨げになる。
この皮肉な現実に、セフィは歯噛みするのだった。

如何ともし難い事態が意外な方向に進みだすのはその翌日の事であった。
ユウキを隊長とする、新編成の航宙機部隊が最終訓練を兼ねての長距離哨戒中、敵航宙機をアステロイド帯の中へ消えていく姿を発見したのである。

「こちらメビウスリーダー、帝國のトンボを発見した。座標は――」
コードネーム、トンボの名で知られるそれは地球におけるレシプロ戦闘機に類似した航宙機である。
通常、敵の大型艦に艦載機として配備されているが、周辺においてそのような大型艦の存在はまだ見付かっていなかった。

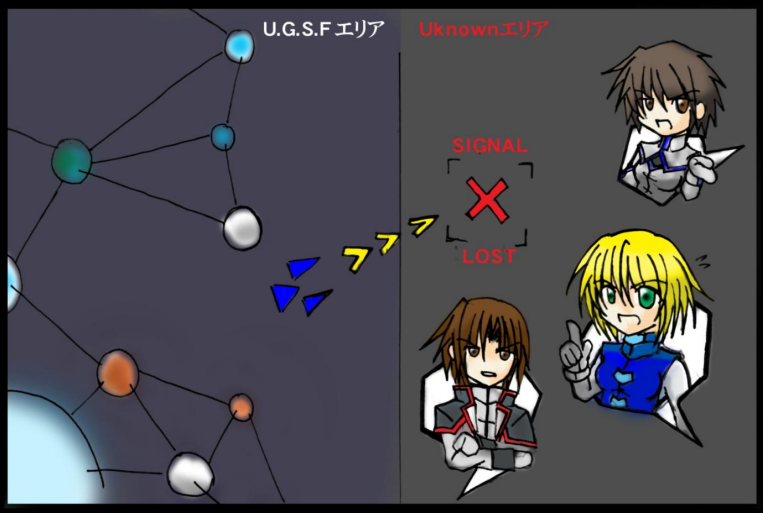
『母艦を持たずにトンボを飛ばす事が出来るとするなら、可能性は一つ……』
セフィは一つの結論にたどり着き、迷わずクラウス大佐に進言した。

『敵の作戦が判りました、尉官級以上のメンバーを召集して頂けないでしょうか……そして航宙機部隊の隊員も。』

オーレリアのブリーフィングルームには艦橋勤務や砲科等の尉官以上級のメンバー、そして航宙機部隊の隊員らが集まっていた。

プロジェクタを操作し、セフィは説明を始める。

「この数日間の間、哨戒中の探査船や偵察艦隊が未踏エリア内で頻発にロストしている件については、既に説明の必要は無いと思います。けれども、原因が何なのか、敵がどのような策を取ったのかについては判らずじまいでした。しかし……今日、航宙機部隊がこのエリアで敵のトンボを発見しました。けれども、周りに母艦と思しき物は感知されてはいなかった。」




「母艦が無いのならば、敵がスペースベースの類を配備している可能性があるわね。」

ユウキがセフィを見る。

「今回、ユウキ達が遭遇した物はそうでしょう。けれども、これまでのケースではトンボの姿すら見受けられなかった事が多々あるのです。恐らく敵は、敢えて艦隊決戦を避け、固定砲台や戦闘衛星を広範囲に配備する事で、我々に出血を強いる作戦に出たのでしょう。」

「なるほど、大型艦を作るペースにおいては連邦に劣る分、連邦以上の設置効率と火力を有する基板上設置型の固定砲台・基地・要塞の類に戦場をほぼ預けてしまえば早期の制宙権確保が可能だ。帝國も思い切った作戦を取るものだ。」

クラウス大佐が腕を組みながら言う。

「敵の砲台等から攻撃を受けず、砲台の位置を探り出し、攻撃するには潜宙艦（次元潜行を行い敵から身を隠しながら潜行ミサイルで雷撃する、言わば宇宙における潜水艦的運用を想定した物）で空域のクリアリングをする必要があるのです。」

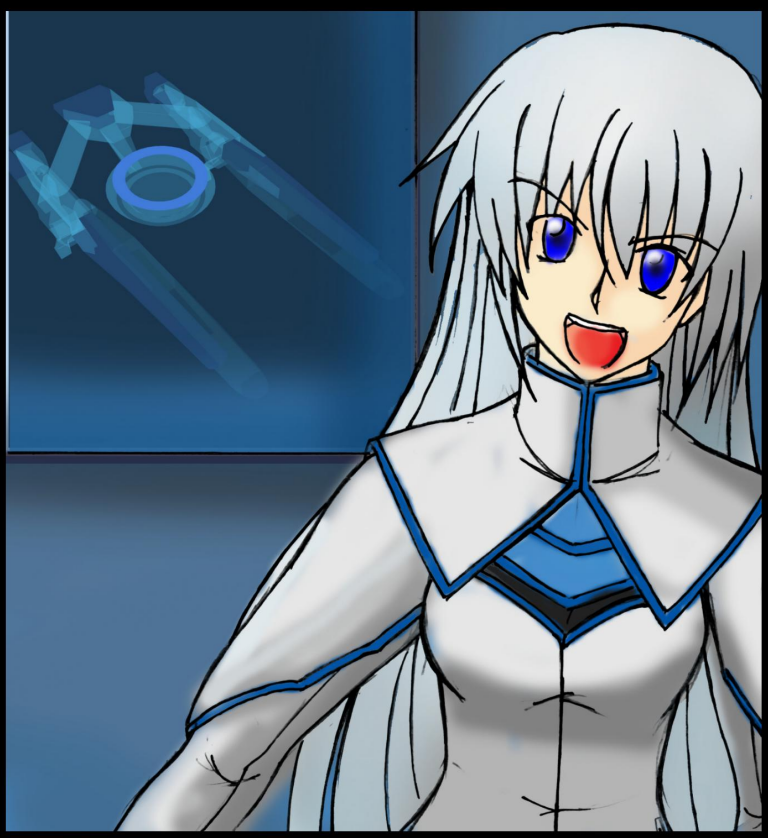
そう、セフィが言い終わらないうちに、クラウスが異論を唱える。

「残念ながら……既に護衛艦や戦艦、母艦を多数配備したこの攻略軍が、単純にこれ以上の新戦力投入を求めるのは難しいだろう。出血を強いられるとしても、耐久力のある戦艦等を先頭に据えて威力偵察の類を行う等の方法で敵陣地内の砲台を探し出すしかあるまい。」

周りが沈黙する中、技術士官の一人、メグミ・フィッツェラルド少尉が立ち上がった。

「ニューコムのDSミサイル艦II型なら直ぐにでも必要な数を揃えられるわ」

幼くも、抑揚ある声に周りの視線が集中した。

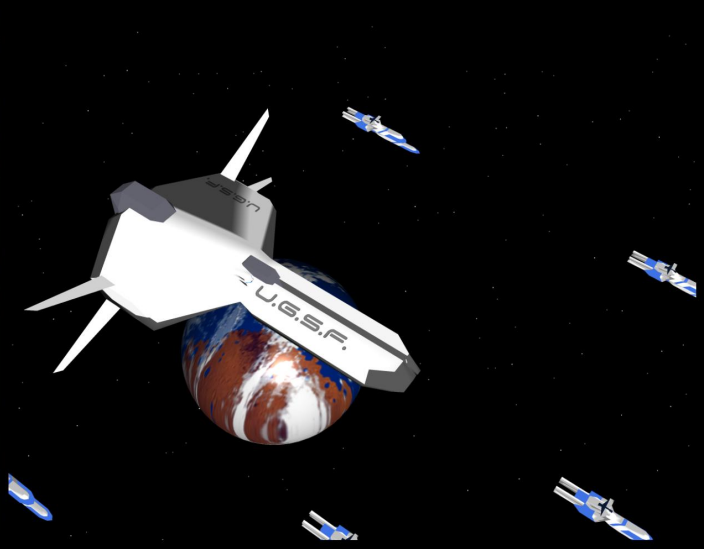


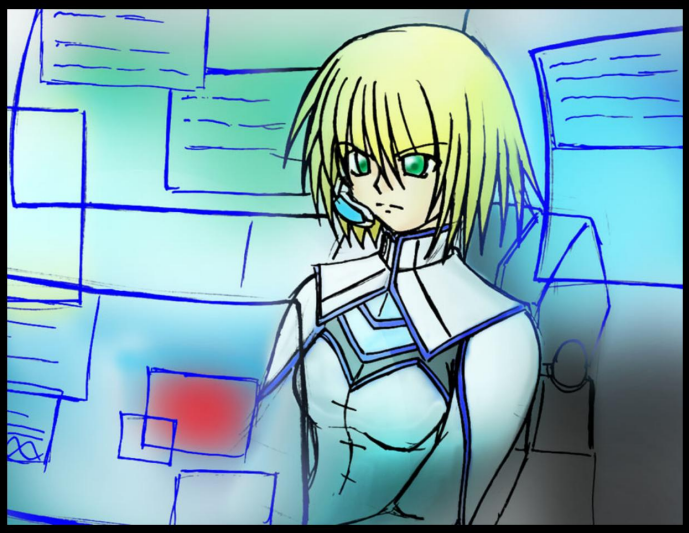
彼女によると、もともと出向元であるニューコムは現在超広範囲を爆撃可能な次元潜行弾頭を装備した艦、所謂DSミサイル艦のアッパーバージョンを開発し、現在実戦テストを行う機械が無いかと中央へと目下交渉中なのだという。

可潜艦が難しくとも、広範囲に渡って敷設された敵施設を空爆するには有効な手段だ。

「もしも、DSミサイル艦II型がこの作戦に必要なのであれば、私からニューコム高官経由で連邦の中央にこの艦隊へのミサイル艦配備を促がす事も可能です。」

自信ありげにメグミはDSミサイル艦II型のデータを示した。



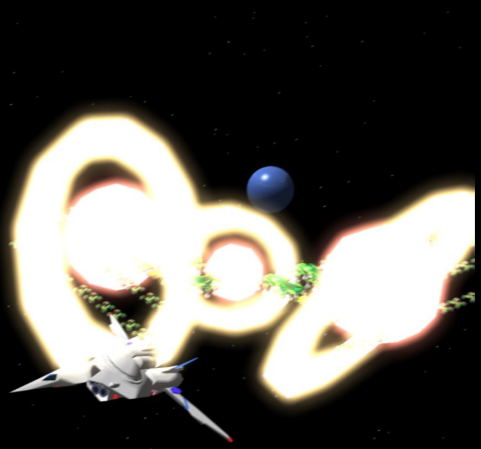
フォートスター空域とコスモ・ラグーン星系の間に位置するセクター31。
ここにはフォートスターを始めとする各戦線にて作戦中の各方面軍を統括する司令母艦（HQの機能を有し、各艦隊旗艦とのデータリンク等を司る）エセックスが停泊していた。

「なるほど、広域敷設された敵要塞群か……これは確かにDSミサイル艦、そして観測機が必要と言うのも頷ける。」
艦橋では、エルネスト少将がクラウス大佐からの追加装備の準備要請についてのレポートを眺めていた。
「DSミサイル艦Ⅱ型を5隻、重戦闘機と専用電子装備をフォートスター攻略軍に手配しろ。」

オーレリアの格納庫では重戦闘機ドラグーンJ2の最終調整が行われていた。
「通常の探査船の加速力・耐久力では先ず敵要塞群からの攻撃に対処する事は出来ない。しかし、ドラグーンJ2であれば十分対処可能だ。今回は上部ドーム内に28席あるガンナーシートを殆ど外し、電子戦装備を搭載する複座型に改造。操縦にはユウキ、そして複座での電子戦要員には本人の熱烈な志望により、セフィールを充てた。未踏エリア各ポイントを調査、敵要塞群の座標を艦隊司令部へ連絡、座標が確定した各要塞へ順にDSミサイルを発射し、敵を殲滅する。諸君の活躍を期待する、以上！」

クラウス大佐から直接の見送りを受け、少々気恥ずかしさと驚きを隠しつつ、ユウキが振り返る。
「セフィ、敵陣の真っ只中に単機で飛び込む……とても危険な任務よ、本当に良かったの？」
無言で頷くセフィを見るにつれ、それまで彼女に抱いていた不信は誤りであった事にユウキは気付かされる。
彼女は信頼に足りる友人であり、仲間である。
仲間を失った悲しみをぶつける先にしてしまった事への後悔。
『（この任務が完了したら、セフィに今の思いを伝えよう――）』
不安交じりの期待を胸に、ユウキ・セフィの二人はドラグーンJ2を駆り、出撃した！

「ポイントT-15、これまで確認した敵要塞群では最も大規模です！」
眼下には敵の航空基地や重砲で構成される大要塞が広がっていた。
突然の敵機襲来に、帝國の航宙機が緊急発進し、ドラグーンに追いすがる。
「セフィ、回避運動はこっちでやる！
主砲の操作をお願い！」
ユウキの声に応じ、セフィはデータ解析・転送をしていた手をブラスター・トリガーへと移す。
主砲であるプロトン加粒子砲が火を噴き、竜の咆哮に敵機が飲み込まれた。



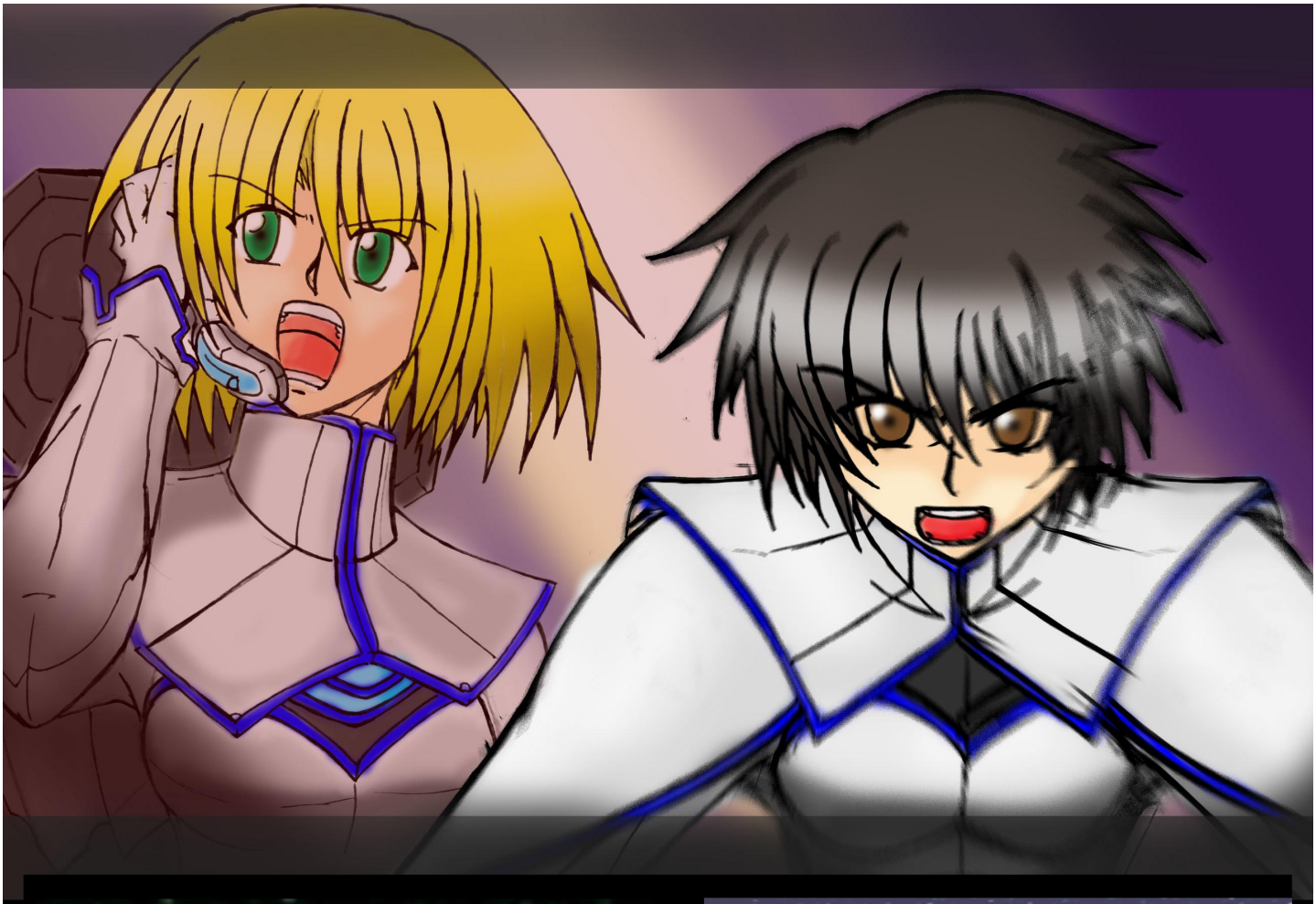
「新たな要塞群の座標を確認した、DSミサイル艦は直ちに攻撃を開始せよ！」
データが着信するいなや、クラウス大佐の指令は艦隊を駆け巡り、DSミサイルが次々と闇夜へと飛び去った。

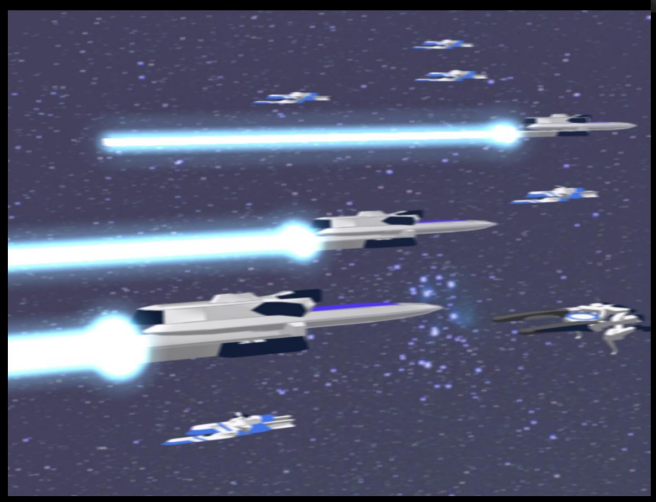
「DSミサイルのワープアウトを確認、着弾までのカウントダウン――5，4，3，2，着弾、今！」
ドラグーンJ2の背後で大爆発が発生する。
超距離をハイパードライブで巡航し、目標地点でワープアウトするDSミサイルが、敵要塞の中心に突き刺さったのだ。
「これで要確認エリアの掃討は終わったわね。」
ユウキが安堵する。
「ちょっとまって……周辺空域の質量、急速に増大中、識別コード照合――軍事帝國の艦艇が次々とワープアウトしてきます！」

「まさかこうも簡単に陣地が落とされるとは……しかし、こちらも手を拱いているワケには！
ガラク・トライゴー！」
ヴェネティクト率いる軍事帝國の艦隊は戦友の仇を討たんと、全速力で眼前のドラグーンJ2へ襲い掛かった。

「このままじゃ……」
ふと、ユウキにあの悪夢が甦る。
「大丈夫、まだやれるわ。」
突然、ユウキの耳に信じがたい声が聞こえた。

「今のドラグーンJ2の電子戦装備なら敵の計器に干渉も出来るし、敵弾の軌道予測精度も他より高いもの。逆に艦隊中枢に潜り込んで敵の旗艦を見つけ出して破壊する事だって！」
この状況下、ここまで危険な発想に至る彼女は余程戦場のリスクを知らないのか、或いは思考回路にトラブルを生じさせてしまったのかと、ユウキは一瞬、驚愕した。
しかしながら、ドラグーンJ2のサバイバビリティがモンスター級であるのは事実であるし現状でセフィが充実した電子装備と共にコーパイを勤めているのも事実である。
「全速力で飛ばすから、気をつけてね。
泣いても知らないんだから。」
その瞬間、ドラグーンJ2は火竜から翼竜へと変貌し、敵艦隊へと猛然と突入した。





「ドラグーンJ2、敵艦隊へ突入！」
「馬鹿な、自殺行為だ！」
オーレリア艦橋はしばしの戦慄に包まれた。
「ドラグーンよりオーレリアへ、これより敵艦隊へ突入し、敵旗艦を割り出します。データを転送しますので、旗艦が判り次第そこへ砲撃を！」

少数ながらも高い耐久力・火力を持つ帝國の艦隊を相手にした場合、敵戦力の完全な撃破は自軍にも少なからず犠牲を発生させる事になる。
セフィ達に賭けて敵旗艦を集中攻撃し、敵の撤退を誘うのは有効であるが、それは戦術としては些か強引でもあった。

「ドラグーンを援護する！
全航宙機隊を緊急出動させ四方より敵艦隊を攻撃、ドラグーンの周辺には残る全てのDSミサイルを巻き込まぬよう撃ち込み、進路を確保、戦艦は前進し敵艦隊中央へ牽制攻撃を開始せよ！」
クラウス大佐は、最大の援護を以って彼女達に最大の成果を生み出させるべく、決断した。

「セフィ、これからDSミサイルの着弾予定座標を送るわ、飛び込まないようにして！」
メグミから着弾予定座標が転送され、ドラグーンJ2のコンソールに表示される。

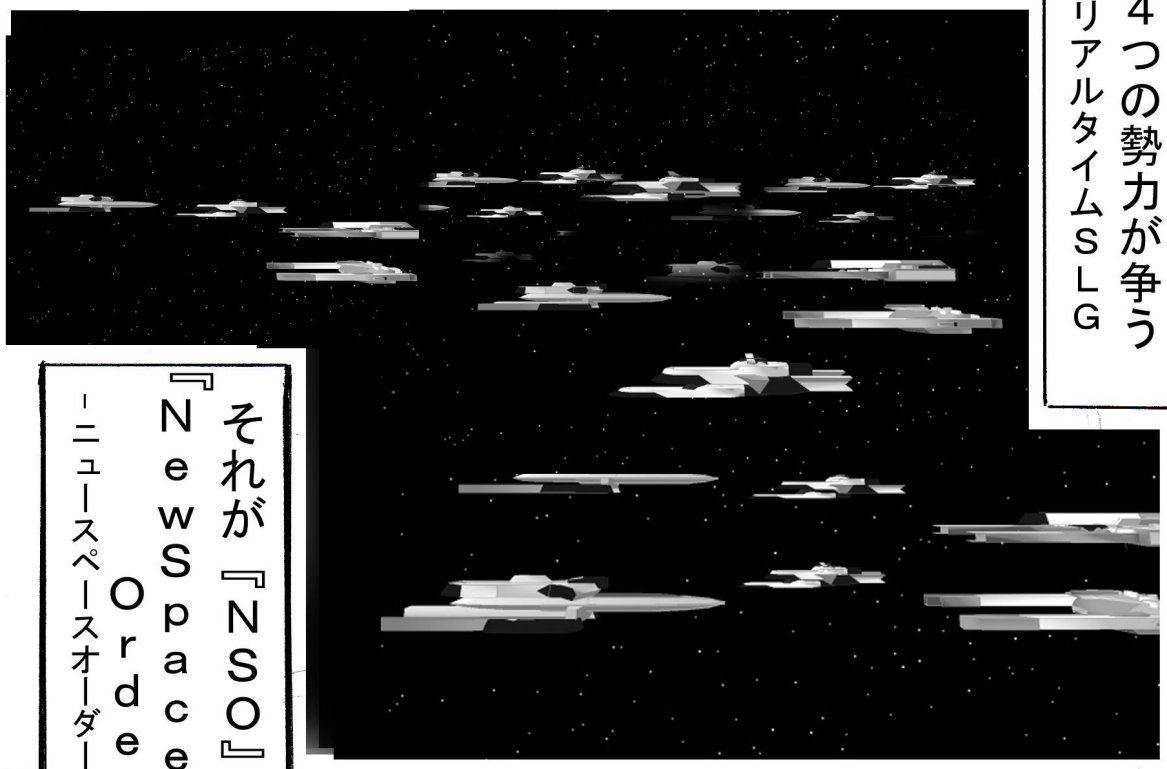
激しい砲撃を掻い潜り、遂にセフィは敵隊の一角に、艦隊内通信が集中する箇所を見つけ出した。
「敵旗艦と思われる航宙機母艦（航空戦列艦）を確認、座標送ります！」
ドラグーンJ2から転送されたデータは直ちにオーレリアの戦術コンピューターを介し全艦へと転送される。
「敵旗艦へ主砲一斉射！航宙機は距離を保ち敵旗艦及び周辺大型艦へ光子魚雷を！」

激しい光が一点に突き刺さると共に、敵艦は大爆発と共に消え去り、間も無く他の敵艦も徐々にフォートスター空域から撤収を開始した……

第二次フォートスター空域攻略作戦、成功
味方側損害――
未帰還機6、艦艇轟沈2、航宙機小破8
艦艇小・中破4――
これがフォートスター空域攻略戦の結末となるが、彼女達の物語はまだ暫く続く……

To Be Continued

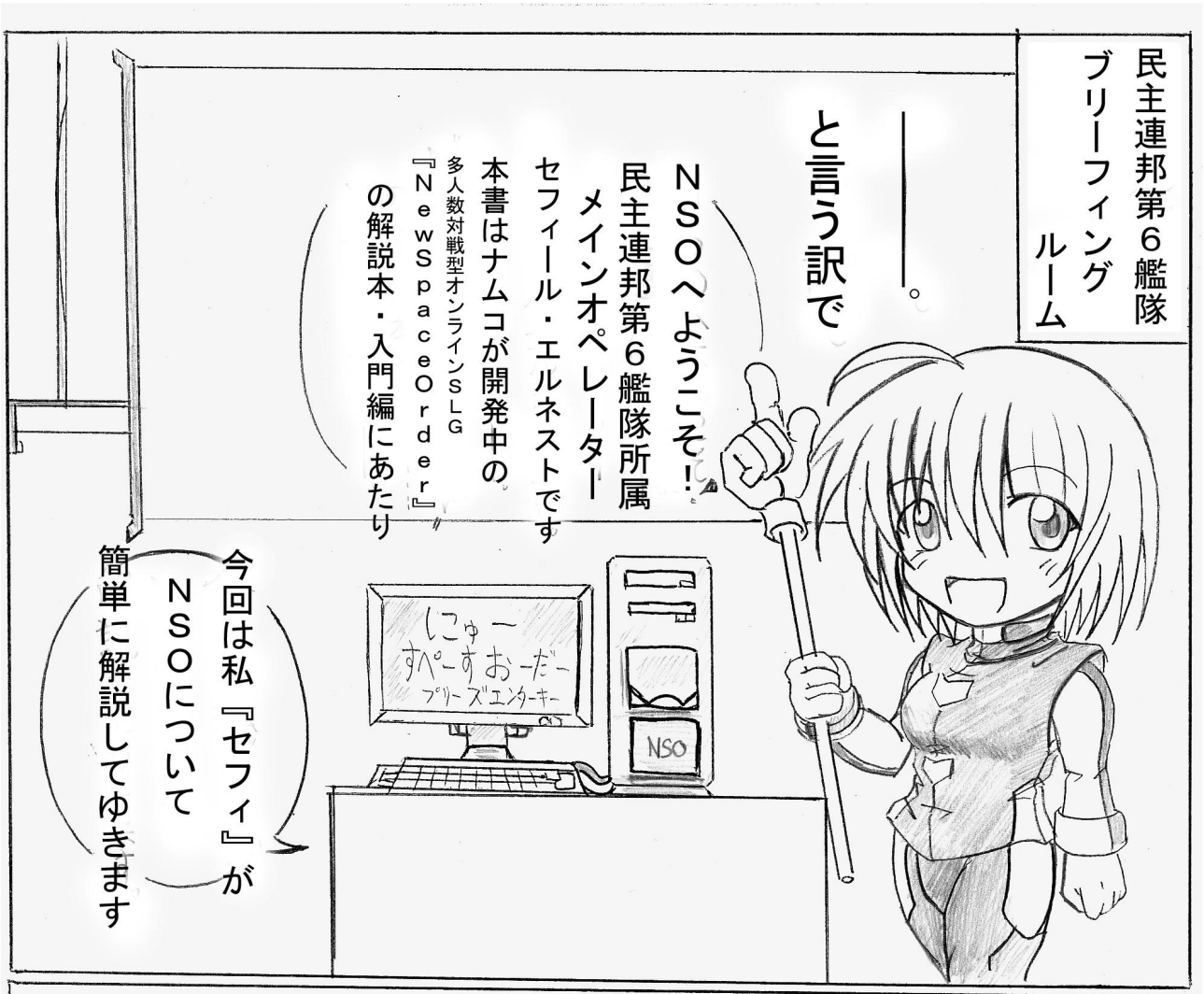
広大な宇宙を戦場に
４つの勢力が争う
リアルタイムＳＬＧ



それが『ＮＳＯ』
『ＮｅｗＳｐａｃｅ Ｏｒｄｅｒ』
－ニュースペースオーダー－

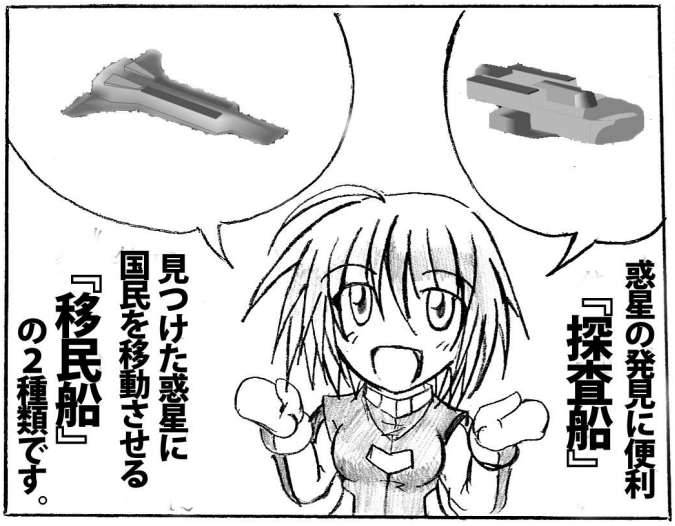
ＮＳＯ最大の魅力は
大軍を率いての『艦隊戦』
そして、艦隊を指揮する

明日の
艦隊指令は
アナタよっ！
ズバリ決定済みよ！


民主連邦第６艦隊
ブリーフィング
ルーム
――。
と言う訳で
ＮＳＯへようこそ！
民主連邦第６艦隊所属
メインオペレーター
セフィール・エルネストです
本書はナムコが開発中の
多人数対戦型オンラインＳＬＧ
『ＮｅｗＳｐａｃｅＯｒｄｅｒ』
の解説本・入門編にあたり
今回は私『セフィ』が
ＮＳＯについて
簡単に解説してゆきます
にゅー
すぺーすおーだー
プリーズエンターキー
NSO

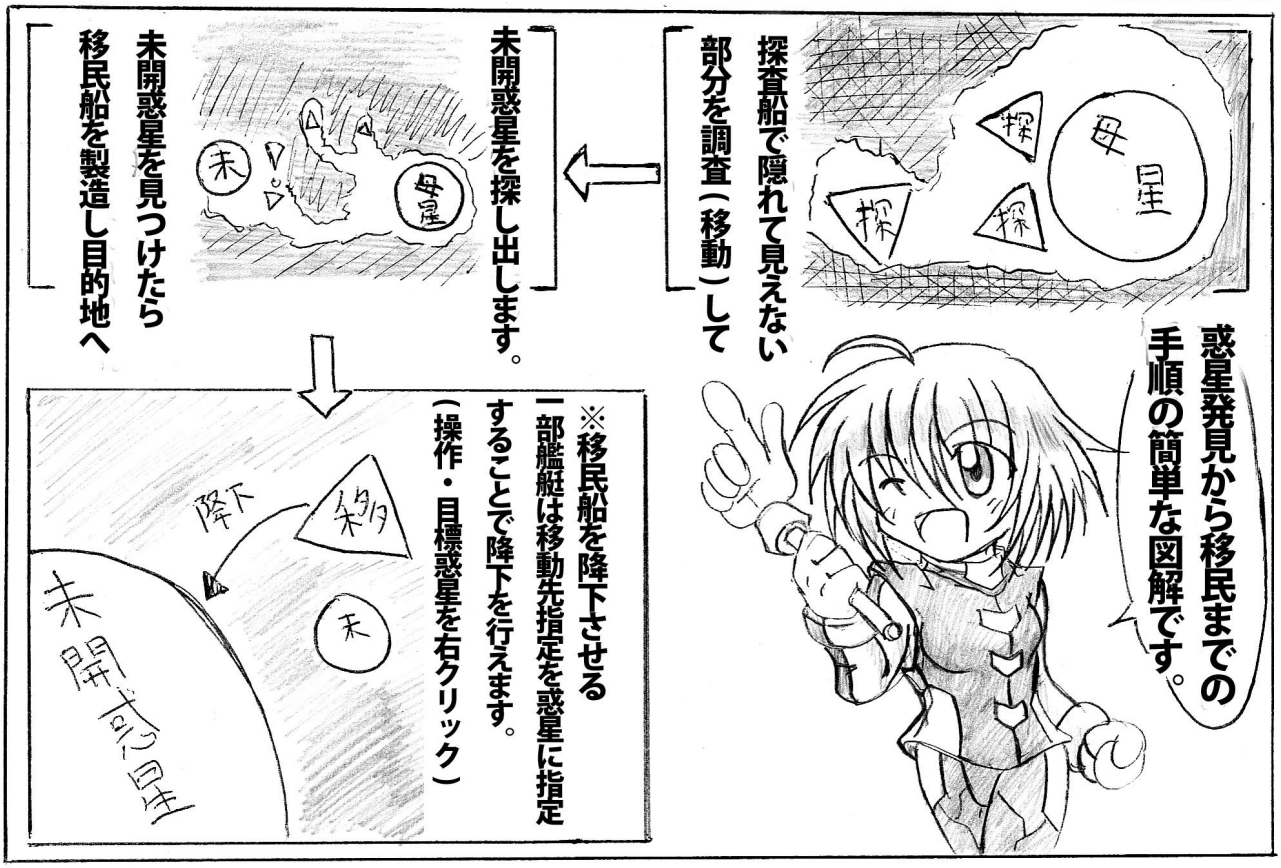
NewSpaceOrder
NSOへようこそ！
～入門編～
『セフィの簡単NSO』

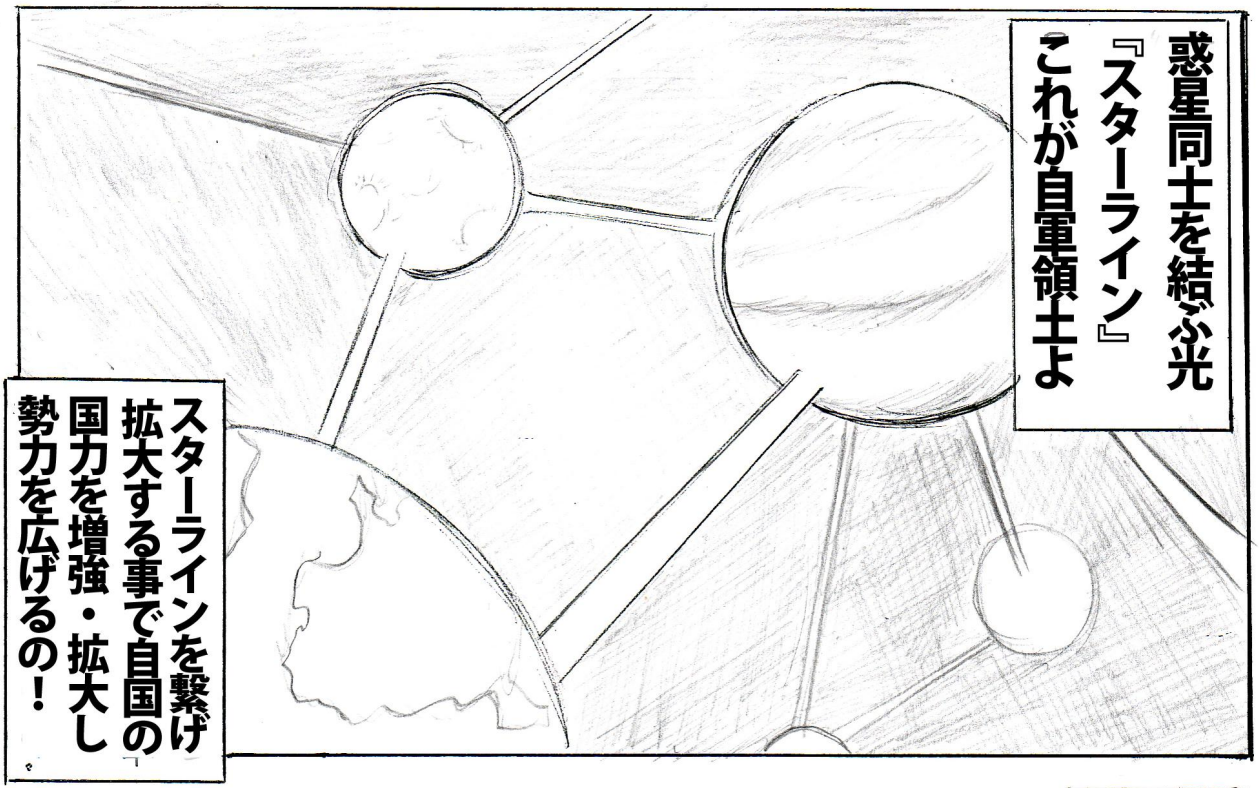
# その１　探査と移民
## －領土を広げよう－












手に入れた星を占拠されたり破壊されてしまうと、スターラインは消滅してしまうから油断は禁物ね

＊スターラインが消失する主な状況

破壊

占拠

何て事すんのよ！

何って…
国土の拡大よ？

# その2　施設とユニット
## - 軍事力を伸ばそう -

1段階目
航空宇宙局 → 2段階目 星系防衛庁 → 3段階目 宙域防衛省

施設の中には
3段階までレベルアップ出来る重要施設があります。

・機体のバージョンアップ
・新兵器・技術の開発
他にも色々……。

領土を確保したら次は施設の配置です

施設では国政や軍事に関する色々なコマンドを実行する事が出来ます

中には生産可能条件が工業レベルの上昇であるモノも存在しています。

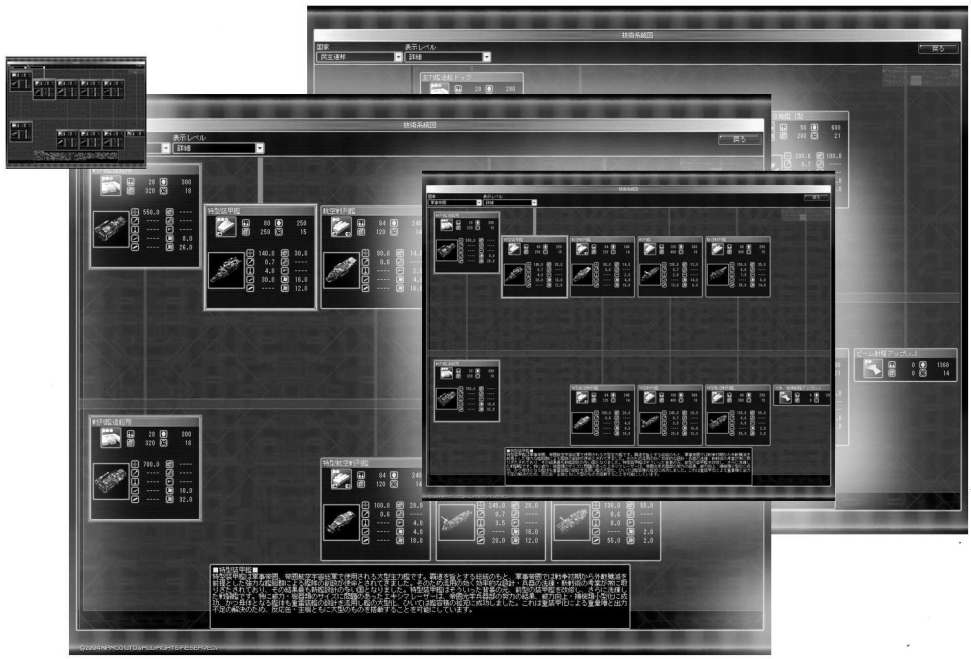
プラネットバスター

開発・技術発展コマンド実行
↓
実行完了直後から新たに生産するユニットが新型になる。

※既存ユニットのバージョンアップ
旧ユニット
↓
『宇宙港』へと搬入
↓
新型にパワーアップ！

施設『宇宙港』では旧機体のバージョンアップや損傷機体の修理・補給が出来ます。

決戦艦



領土の確保とッ説の配置を終えたら次は……いよいよユニットの生産に移ります

最大同時保持数…２００機
施設内同時生産数…１０機
生産所要時間……ユニット毎に時間差有

ゲーム中は最大２００機のユニットが作れます
１プレイヤー２００機よ

１つの施設につき最大で１０機まで同時に生産が出来ますが、中には生産時間が長いものもあるので注意が必要です
高レベルなモノ程時間が掛かります

これらを上手く実行してゆくと…

画面を埋め尽くすユニット同士の大艦隊戦が展開されます！！

ユニットは国の要…強い方が良い…
でもソレは、間違った考え方です！
同じユニットばかり生産していると
苦手ユニットに勝てなくなります。

護衛艦：潜宙艦、艦載機に強い
　　戦艦系ユニットに弱い
潜宙艦：護衛艦系に弱い
　　それ以外に強い
戦　艦：護衛艦ユニットに強く
　　攻撃力も高いが、潜宙艦
　　艦載機に弱い
これらは機種全体の一部です。

それぞれのユニットには
相性の良い相手と
悪い相手がいます。

背後を取れ！
## 機体防御の強弱

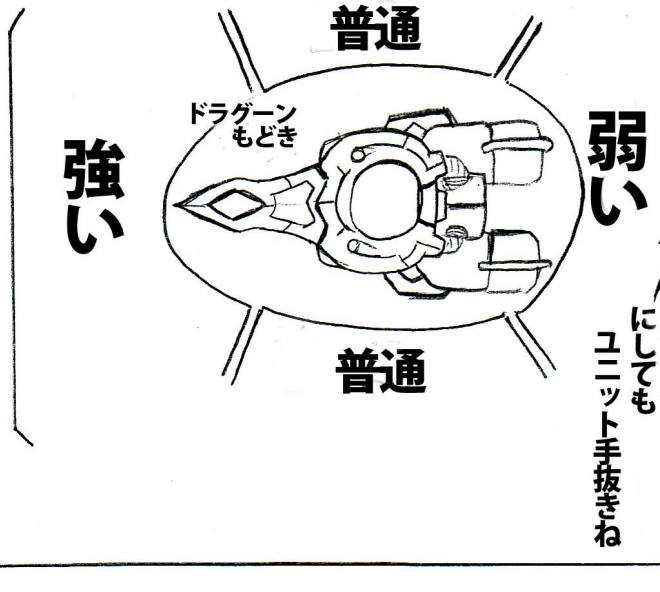
相性の他にも霊要なのが
攻撃を受ける方向によって
変化する機体の防御力

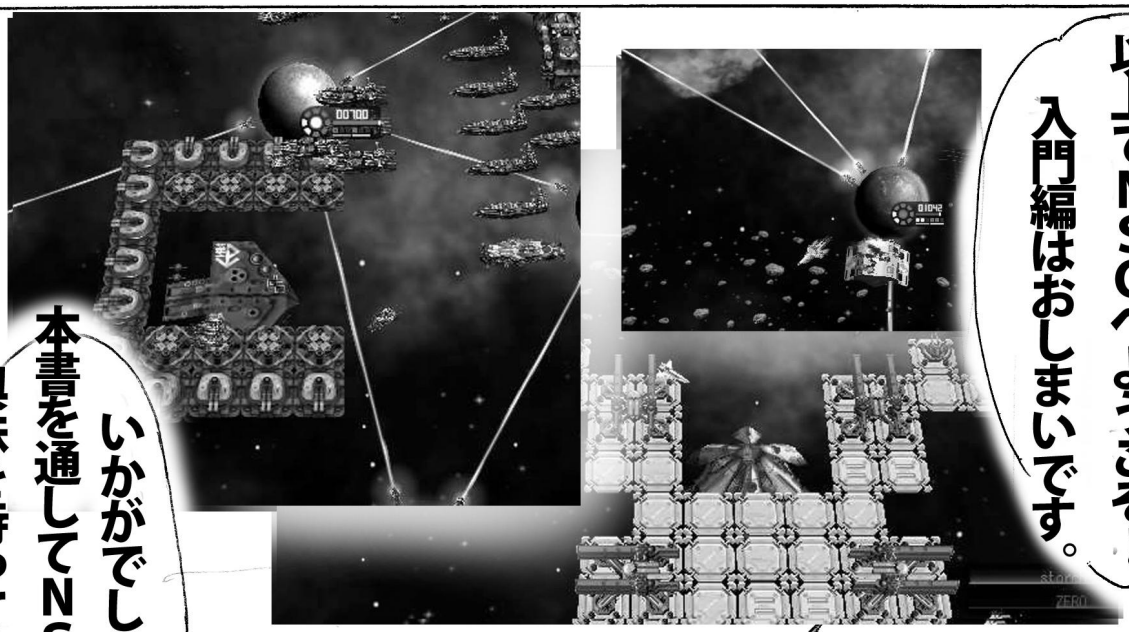
正面同士＝相性有利

※イラストはあくまで
イメージです

この防御力の変化を利用して
戦いを有利に進めましょう！

背後を取った場合一方的に攻撃





以上でＮＳＯへようこそ！
入門編はおしまいです。

それでは最後に――――
総員戦闘配備！！！
冬に備え演習開始よっ！

いかがでしたか？
本書を通してＮＳＯの世界に少しでも
興味を持って頂けたら幸いです♪

次に逢う時は星の海で
お会い出来る事を祈って・・・

ＮＳＯへようこそ！
～入門編～
☆おしまい☆

# ライナーノーツ

この度はSTAR ARCHIVEをお手に取って頂き真にありがとうございました。
久々のナムコU.G.S.F.シリーズ新作ゲーム、NewSpaceOrderの布教・ファン活動の一環として、昨年から始めた二次創作活動も、前回の無料本少数頒布からオフセット本の頒布へとステップアップする事が出来、漸く軌道に乗り始める事が出来ました。
これもリアル・ネット双方で温かい声をかけて下さった方々、そして今回も非常にタイトなスケジュールながらも素晴らしいテキスト・イラストを提供して下さった参加ライターの皆様のお陰です。

以下、今回収録させて頂きました３作品について、ライターのご紹介兼ねてコメントを簡単ですがさせて頂きます。

『ある日の二人』　文：にーやん　作画：マナ
SRCシナリオやSS等で日常感溢れるテキストで定評のある、にーやん氏に、NewSpaceOrder公式サイトで公開中のFlashノベル、Link Of Lifeの二次創作SS――特に、公式ではあまり触れられていなかった日常のワンシーンをというオーダーで執筆して頂きました。
作画は主に少年漫画系の二次創作で特に少年・青年キャラに深い愛を抱かれている、マナ女史の担当です。
絵・文共に、サイトウ中尉のぶっきらぼうながらも優しいキャラクターと空回りし勝ちなアイルヤのキャラクターが出ております。

『フォートスター空域会戦』　文・3DCG：Storch　作画：火鳥雄希
昨年からの悲願であった、U.G.S.F.テーマのストーリー作品を！
というコンセプトの元、昨年実際に火鳥氏にNewSpaceOrderをプレイして頂いた際のプレイログを脚色したイラストストーリーです。
ストーリーとメカ描写を私が、キャラクター描写を火鳥氏がそれぞれ担当。
昨年頒布したNewSpaceOrder劇中曲アレンジDVDでも3Dのメカが登場しましたが、ご存知の通り品質的にみて非常に「しょっぱい出来」だった事もあり、今回は全データを作り直しましたが如何だったでしょうか？
2Dパートについて、特に火鳥氏の担当分量とスケジュールが非常に大変な中、力作を仕上げて頂き、ありがたいやら申し訳ないやらと言った所です。
また、同氏のアシスタントを徹夜で勤めて下さったというＺＡＧさんにも深くお礼申し上げます。

『NewSpaceOrderへようこそ！』　構成・作画：火鳥雄希
昨年頒布した無料本の採録。
ナムコの新作ゲーム、NewSpaceOrderの紹介・チュートリアルを今回のイラストストーリーにも登場したセフィ・ヴェネティクトの二人が進めるコミックです。
正直な話、正式リリースがどうなるかまだ不明瞭なＮＳＯですが、これをご一読の上、プレイ日に備えて頂ければ幸いです。

最後に――
ＵＧＳＦ．ＯＲＧはまだまだ出来て間も無く、至らない所のあるサークルではありますが、どうぞこれからも宜しくお願いいたします。
最後に、この本をお読み頂きました皆様、そして執筆者の皆様に深く代表としてお礼申し上げます。

2007 7/8 Storch

冊子名：STAR ARCHIVE
製　作：ＵＧＳＦ．ＯＲＧ
代　表：Storch　　連絡先：clann@ugsf.org／http://www.ugsf.org
出　版：株式会社ポプルス 様
当同人誌はナムコ・U.G.S.F.シリーズ、及びＮｅｗＳｐａｃｅＯｒｄｅｒのファン活動における非営利範囲での頒布を目的に製作されております。
バンダイナムコゲームズその他各企業との直接関係はございませんのでご注意ください。
この物語はフィクションです。実在の人物・事件等とは一切関係ありません

*ドラグーン緊急発進せよ――*
*――そして、死力を尽くせ！！*

STAR ARCHIVE
UGSF.ORG
http://www.ugsf.org/
clann@ugsf.org